

人生は何色？

奨励	棟方 信彦【むなかた・のぶひこ】
奨励者紹介	頌栄保育学院院長・頌栄短期大学学長

人間の心は自分の道を計画する。
 主が一步一步を備えてくださる。

(箴言 16章9節)

同志社スピリットとの出会い

本日は、同志社大学のスピリットを想い起こす特別な記念の礼拝に、お招きいただき、光栄に存じます。同志社人としての私は、文学部社会学科への入学に始まります。卒業後の進路選択は就職課のルールに従い、私の思いとは異なる形で電通に入りました。33年経って電通を早期退社すると同時に、2006年に神学研究科博士後期課程に満期まで9年在籍しました。この間一貫して同志社にシンパシーを保ってきました。そんなお付き合いの中で、今日のこの礼拝が初めての恩返しと言えます。この機会を備えてくださった、元同僚の森田喜基先生のお心遣いにも感謝したいと思います。キャリアのことに触れてほしいとの要請がありましたので、自慢に聞こえたら申し訳ないですが、素直に話してみたいと思います。最初に結論めいた話をしますと、人生の歩みは思い通りには進まないということになります。

私は1948年生まれの団塊の世代で、今年73歳になります。少しは自分の人生を振り返っても良い年齢ではないかと最近感じています。

私と同志社とのそもそもの関わりは、父が神学科卒の牧師であり、また暫くの間、神学部教授を勤めていたことによります。私以外に兄2人も同志社大学にお世話になっていたこともあり、中学生の頃から身近に感じておりました。けれども大学受験の時には、家計の事情もあり、同志社大学は受けてはいましたが、通えないと思っていました。ところが予測通りに成らないのは運命のいたずらでしょうか、2年間の受験を通じて合格したのは、滑り止めを除いて同志社大学だけで、この時も思わぬ形で進路が定まり、自分としては奨学金を必ず獲得する覚悟で通い始めました。この時以来、人生の岐路に直面し歩みを進めるたびに、ポディブローのように未達成感が付きまといました。

格好を付け過ぎかもしれませんが、大学入試には失敗したとの思いの中で大学生生活をスタートさせたことが、私自身の学が姿勢に影響したかも知れません。奨学金を失うことが出来ない状況でしたので、4年後の就職では思い通り志望を実現しなければと、まるで点取り虫の気分であったことが思い出されます。教職課程も含めて真面目に学修したと思います。時代は学生運動の渦中。そんな中で、今振り返っても忘れられない授業が幾つかありましたが、同志社スピリットの点からは、一般教養の化学を担当された末光先生の授業が記憶に残っています。講義の合間に、毎回必ず同志社の歴史に関わるエピソードを紹介してくださいました。数年前の大河ドラマ『八重の桜』でも登場していた八重の兄の山本覚馬の名を知ったのもこの授業でした。卒業後、度々思い出すこの授業の読後感のように残る印象は、自分の所属する学校のことを大切に思う心と、その価値を若い世代に躊躇うことなく伝えようとしていた母校愛でしょうか。今言う自校歴的の科目は無かった環境で、良質な建学の精神の教育を担ってくださったということになります。今思えば、良い大学で学んでいるのだとの自信が育まれる機会でした。

もうひとつ忘れられないのは、会社を辞めて再就職したのが、熊本であったことが関係します。ご存知のように熊本と同志社には深い関係があります。草創期の同志社に影響を残した熊本バンドのことで。熊本には6年滞在しましたが、例年1月30日の早天に開催される花岡山での熊本バンドの早天祈祷会にほぼ毎年参加できたことです。毎回同志社から説教者が来られます。また、この記念礼拝に参加する同志社の熊本ツアーの参加者との交流もありました。

同志社スピリットと言えば、牧師の私としては会衆主義教会の精神と通じる意味から、その価値観の片鱗に触れたのは、教会生活の歩みの中であると思っています。中でも組合教会の交わりとして、同志社での牧師と信徒の研修などもよく同志社スピリットが養われたことでした。私の理解ではその価値観は、自由、自主独立、自給自足ということでしょうか。折に触れて自分の歩みから身に付いた自己アイデンティティの中に、同志社スピリットの精神が含まれるように思えてきました。何も同志社を代表するような存在ではないものの、いつしか同志社色を自分の一部のように感じている自分があるのです。このアイデンティティは、一人一人を大切にすることで生まれてくる豊かな多様性の中で、周囲から揺さぶられながら気づかされ、深まっていくようなものかと思っています。

会社内のキャリア色選択と2色化へ

さて、これからは職業選択の話に移りたいと思います。卒業後、思わぬ形で決まった志望業界のマスコミに隣接する業種である電通に就職し、大阪支社で社会人として歩み始めました。7年目に東京本社勤務となり、自分としては不向きと感じていた営業職に就きます。人付き合いがあまり得意で無かったと思っていたせいでもあります。社内の周辺もそう見ていたらしく、適応できるかどうかを心配されていたことを後で知りました。結果的には、早期退職で電通生活33年の中で、営業職が一番長かった。自己評価は当てにならないものとも言えるかもしれませんが、強い個性に混ざりながらも、置かれた現場で誠実に自分の個性を保って勤めを果たせば用いられるとも言えるでしょう。ただ忘れてはならないのは、体験を通した学び、現場の持つ教育力の大きさは想像以上のものがあることは確かなことと思っています。地位や担当する責任範囲に応じて求められる資質が育つのです。

会社勤めを改めて考え直す機会が突然訪れました。自分にとっても家族にとっても人生の大きな岐路になりました。ちょうど40歳を目前にした時期、それまで現役の牧師を続けていた父が亡くなったのです。その時、長兄が既に牧師となっていました。私たちが夫婦の親戚には現職を含め牧師が少なからずいたこともあり、私にとってはそのことが自分に問われた気がして、私の専門性というか職業そのものが何色であるべきかを考えることへと繋がって行きました。何がどのように働いたのか正確には分かりませんが、日本キリスト教団の基本データを掲載している『日本基督教団年鑑』を見ていた時です。この年鑑には、教団所属の牧師名簿がありますが、召された父の掲載箇所に目が留まりました。かつてはここには叔父、父、兄の名前が並んでいました。叔父は召されておりましたので、3人が2人になっていました。父が召され2人が兄1人になってしまう現実が私の臍を揺さぶったような感覚です。会社生活は厳しくも楽しい時間で、会社への感謝の思いは確かなものでしたが、その後病気で会社を休んだことも重なって、当然会社内の自分の将来を考え、打診も受ける年齢に当たりました。これ以上、自分の社内専門性を営業に置いておくことはやめ、当面は牧師職を目指す準備と両立できる職場、社内スタッフ部門を希望することになりました。それでも伝道師試験に受かった年に会社では部長待遇、正教師試験(牧師資格)合格の年に結局は部長に就任し2色生活、二足(色)の草鞋(わらじ)が始まりました。この間担当した教会は2つ。最初の教会は信徒時代から関わった開拓の地でした。二足は楽しくもあり厳しい仕事でした。

なぜ牧師なのか。その一つの答えは、先にお話したように牧師が守るべき家業と感じられたことがあります。それ以上の原因として、生前の父が、折に触れて私に語ったことが、纏めて押し寄せてきたと感じたことも大きかった。父の生き方を振り返る時、語っていた言葉を想起することになり、決して繰り返しても明確にも牧師を勧められてなかった自分が、何を期待されていたのか明確になってきたのです。勿論、私の家族にしてみれば、転職には不安が伴いますし、私が2色、職を目指すことを母は亡くなるまで懸念を示していました。それでも、周囲は私の我が儘とも言える歩みを暗に認めてくれ、支えてくれました。今から30年以上前の話です。当時は今ほど人生100年時代的な、第二の人生、第三の人生との考え方はなく、転職は家族にとってもリスクでした。100%の我が儘は通りません。我が家の事情から牧師を目指しながらも、収入の道も確保して家族を路頭に迷わせないことも必要でした。牧師としての歩みの最初は、月～金ビジネスマン、土日牧師との兼業でしたが、会社を早期退職してからは半年の無職の後、幸運にも大学教員のポストを得ることができました。牧師との兼業生活が続けられる環境が備えられました。その後、二つのキリスト教主義学校の学長として、思わぬ機会に招かれました。大学卒業の時には、思いもしなかった歩みが続いています。

私の牧師としての働きは極めて変則的です。けれども、そのことは私の果たせる責任があれば、それが私の牧師としての使命と考えるようになっています。本職の世界でも、兼職の世界でも批判を含めて色んな意見があることは分かっています。私なりの使命を与えてくださるのには神様と信じ、私なりに同志社スピリットの示す自由、自立の精神を忘れないで歩み続けたいと思っています。

人は計るが神が決する

最後に、本日の聖句のメッセージを共有化させて頂きたいと願います。私自身のこれまでの歩みを振り返る時、人生の大きな選択に直面した折、当初の思いとは異なる道を歩む結果に至っていることに気づきます。その時々で最終的には神様にお委ねする気持ちで、思わぬ道筋を歩んできました。私の人生は何色(なにいろ)であるべきか、何色(なんしよく)であるべきか、この道で良いのか考えることを反問しながら、人は計るが神が決するとの聖書の言葉を受け入れることができています。聖書には、「人の心には多くの計画がある、しかしただ主の、み旨だけが堅く立つ」(箴言19章21節口語訳)ともあります。神様に委ねて、これからの歩みも続けていきたいと思っています。